

# ノートルダム清心女子大学におけるトランスジェンダー学生 受け入れ決定経過と準備 —キーパーソンへのインタビューから—

小林謙一<sup>1)</sup>・小田久美子<sup>2)</sup>・中井俊雄<sup>3)</sup>・大倉恭子<sup>4)</sup>・土師裕子<sup>5)</sup>

中尾賀要子<sup>6)</sup>・安東由則 (編者) <sup>7)</sup>

## 要旨

ノートルダム清心女子大学(岡山市)は、2023年度より、女子大学としては全国で4番目、私立女大学では宮城学院女子大学に次いで2番目にトランスジェンダー女性の受け入れを始めた。大学においてトランス女性の受け入れ決定に至る経緯とその準備状況について明らかにするため、この取り組みにおいて中心的な役割を果たしてきたキーパーソンらにインタビュー調査を行なった。本報告はそのインタビュー内容をまとめたものである。

カトリック教会を母体とするノートルダム清心女子大学が、トランスジェンダー女性の受け入れを決定し、準備から2年足らずで受け入れを始めることができた背景には、学長の理念と決断、さらにはこれまで大学において育まれてきた、学生一人一人によりそうテラーメイドな教育を実施し、ケアシステムを十分に担保してきた経験とそれに基づく自信が存在する。日々刻々変わっていく状況の中で完全な準備などなく、今後新たな課題も生じてくると思うが、不断の研鑽を行なっていく他はないとの語りがなされた。

キーワード：トランスジェンダー受け入れ、女子大学、準備過程

## 目次：

1. トランスジェンダー女性受け入れ開始までのタイムライン
2. ノートルダム清心女子大学のキャンパス風土
3. トランスジェンダー女性の受け入れ議論
4. 受け入れ決定後の学内準備とその難しさ
5. これまでの取り組みの反省、今後の対応課題

1) ノートルダム清心女子大学・副学長、人間生活学部・教授 2) 同大学・学務部長、人間生活学部・教授  
3) 同大学人間生活学部・准教授 4) 同大学 施設企画管理部長 5) 同大学学務部事務長(以上、インタビュー当時の役職) 6) 武庫川女子大学教育総合研究所・准教授 7) 同大学同研究所・教授

# ノートルダム清心女子大学におけるトランスジェンダー学生受け入れ決定経過と準備 —キーパーソンへのインタビューから—

日 時：2023（令和5）年12月21日（14時45分～16時15分）

場 所：ノートルダム清心女子大学

ノートルダムホール中央棟10階 第三会議室

参加者：小林謙一・小田久美子・中井俊雄・大倉恭子・

土師裕子（以上、ノートルダム清心女子大学）

安東由則・中尾賀要子（以上、武庫川女子大学）

## 参加者の紹介（インタビュー時）

小林謙一：教学担当副学長、人間生活学部・教授、専門は生化学、基礎栄養学。2020年よりインクルーシブ教育研究センター教授を兼任。2021～2022年度まで学務部長、2023年度より副学長として「多様な学生受入れ委員会」の委員長となる。

小田久美子：人間生活学部・教授、同窓生。専門は美術教育で、子ども描画の研究に取り組む。学務部長補佐を経て、2023年度より学務部長となり、トランスジェンダー女性の受け入れに関わっている。

中井俊雄：人間生活学部・准教授、専門は社会福祉学で地域支援に取り組む。「多様な学生の受入れ委員会」発足時からのメンバー。

大倉恭子：施設企画管理部長、同窓生。「多様な学生の受入れ委員会」発足時よりメンバーとなる。同窓会への連絡・対応等も行う立場にある。

土師裕子：学務部事務長、同窓生。「多様な学生の受入れ委員会」の発足時より、事務局メンバーとして関わっている。

## 1. トランスジェンダー女性受け入れ開始までのタイムライン（大学からの説明）

**大倉** 本学の方で、時系列で今までの経緯を簡単にまとめた資料を用意いたしましたので、それにそってご説明をいたします。では中井先生、この表に沿ってお願いできますか。

**中井** 経年表は11項目で整理をしています。まず、2021年10月26日に行われた第12回学長諮問会において、本保副学長（当時）からトランスジェンダー女性の受け入れについて、本学でも前向きに検討していくことが提案されました。協議を進めながら考えていこうとのことで、始まりました。

同年11月1日に学内委員会が設置され、その後、11月10日にはLGBTQの基礎知識を得るために、岡山大学の中塚幹也先生<sup>1</sup>から講義をいただきました。コロナ禍でしたのでZoomの配信が中心でしたが学内研修を行い、12月に入って委員会を初めて開催ができたという流れです。

集合での委員会の開催はこの1回限りなのですが、そこで以降のスケジュールや具体的な流れ等について整理をして、その後は集合ではなくて個々の担当者がそれぞれに動くということで、委員長の下、取りまとめをしていただいたという経緯です。

2022年度に入り、5月の第2回教授会で受け入れの決定、そこまでに書類を整えたり、学内での取組をしていこうという流れでした。同日、受け入れのガイドラインを制定することを決め、

<sup>1</sup>岡山大学大学院保健学研究科教授、産婦人科医、GID（性同一性障害）学会理事長。不妊治療の他、ジェンダークリニックにおける診察、性別適合手術の実施など、トランスジェンダー医療の第一人者。

6月1日から、本学のホームページに掲載しました。その後、委員会の名称について若干修正があったり、委員の追加があったりを経て、今日に至っております。

6月15日には、入試要項にトランスジェンダー学生の受け入れを記載して学生を募集し、入試に向けて受け入れ準備を整えていきました。ガイドラインを策定したり、プレスに情報を出して広報したりしていくことも併せて行なっています。本日、お手元にもお配りしておりますように(下表)、津田学長<sup>2</sup>へのインタビュー記事等が地元の新聞に掲載<sup>3</sup>されました。

表. 多様な学生（トランスジェンダー女性）の受け入れについての経年表

1	2021年10月26日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年度 第12回学長諮問会において、本保副学長(当時—専門は障害児教育)から、トランスジェンダーの学生の受け入れについて、本学においても、前向きに検討していくことが提案され、種々議論の結果、検討を進めていくための委員会を設置することが了承された。(学長からの提案)</li> <li>・学内での共通理解を得るために、講演会を開催することとなった。</li> </ul>
2	2021年11月1日	「多様な学生の受け入れ委員会」発足
3	2021年11月10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FD研修会</li> <li>「LGBTQ/SOGIの基礎知識：多様な学生の受け入れについて」(講師：中塚幹也氏〔岡山大学大学院保健学研究科教授〕…産婦人科医、トランスジェンダー関連では、性別適合手術の実施や性的違和の診療・支援の第一人者)</li> </ul>
4	2021年12月2日	2021年度 第1回多様な学生の受け入れ委員会開催 <ul style="list-style-type: none"> <li>・受け入れを2023年度入試から行うことを確認</li> <li>・ガイドラインの作成</li> <li>・設備の改修の検討</li> </ul>
5	2022年5月11日	・2022年度 第2回教授会において、本学では2023年4月からトランスジェンダー女性の受け入れを決定した旨の報告があった。
6	2022年5月11日	・「多様な学生（トランスジェンダー女性）受入れガイドライン」制定
7	2022年6月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学HPに2023年度からの多様な学生の受け入れについて学長メッセージを公開</li> <li>・委員会名称変更「多様な学生の受け入れ委員会」→「多様な学生受入れ委員会」</li> <li>・委嘱換え(委員の追加)</li> </ul>
8	2022年6月15日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年度の入試要項の中に、2023年度から多様な学生の受け入れ(トランスジェンダー女性)を行うことを記載し、「入試要項の変更」というかたちでプレスリリースを行った。</li> <li>・2022年度 第2回定例評議会(6月)において、多様な学生(トランスジェンダー女性)受入れガイドライン制定およびプレスリリースの報告が行われた。</li> </ul>
9	2022年7月24日	山陽新聞(朝刊)に学長インタビューが掲載される。
10	2023年1月	・みんなのトイレサインを設置
11	2023年4月	・多様な学生(トランスジェンダー女性)の受け入れを開始

<sup>2</sup>津田葵学長はノートルダム清心女子大学の卒業生で、アメリカの大学教員、大阪大学教授などを経て、2017年にノートルダム清心学園・理事長就任、2021年より学長を兼務しており、今日に至る。

<sup>3</sup>「多様性や価値観尊重：トランスジェンダー学生受け入れる清心女子大」(『山陽新聞』2022年7月24日朝刊)において津田学長へのインタビューが掲載された。受け入れを「特別なこととは考えていない」、「学生一人一人が自分らしく生きることが出来る大学でありたい。多様な人々が共生し、活躍できる社会の実現に貢献できることを期待している」などと述べている。

学内の整備としては、トイレのサインがそれまで車椅子マークで、いわゆるバリアフリー・トイレだったものを、どんな方でも利用できるトイレサインに変更いたしました。

**大倉** ご多忙の中、お越しいただきましたので、ご質問もお受けさせていただきます。  
〈ここから、会議を終えた小林副学長が参加〉

## 2. ノートルダム清心女子大学のキャンパス風土

**安東** ありがとうございます。先日、メールで送付しました質問項目に沿ってお尋ねしていきます。

2021年から本格的にトランスジェンダー学生の受け入れ議論を始めたということですが、それ以前に、貴学でジェンダーでありますとかLGBTQへの対応について、授業であれ、特別な催しであれ、何か取り組まれていたことはありましたか。

**小林** 特に本格的に何かを行っていないのですが、女子大学ですので、一般教養的な授業であれ、専門科目であれ、ジェンダーに関わる授業の科目が従来からございますし、ジェンダーだという科目ではないにせよ、個々の授業の中でそういう話をされているかもしれません。大学全体としてジェンダーに関する話をするというものはありません。

**大倉** 中井先生は、ゼミでもされていたと思いますが。

**中井** 特定の授業科目ではないのですが、地域福祉を専門とする私のゼミでは、地域の中には多様な方がおられますので、ジェンダーに興味をもって研究を行い、卒業研究のテーマに取り上げる学生がちらほら出ているようなことはあります。

**安東** 学生の活動として、LGBTQ関連のテーマに取り組んでいる、例えばレインボープライド<sup>4</sup>などの運動・活動に参加するといったクラブやサークルはありましたか。

**中尾** 関連しますが、岡山大学にはジェンダークリニック<sup>5</sup>があるわけですが、そういう拠点的なものがあることの影響といますか、何か地域的な影響もあって学生が割と知っているといったことはあるのでしょうか。

**中井** 例えば、先日もレインボー・パレードが岡山駅前からあったのですが、学生の中にはそれに参加をさせていただいたり、ボランティア活動の中で一緒に取り組んだりということは聞いています。一緒に参加をさせていただいたりしていますが、岡山大学と具体的にコラボレートするという動きにはなっていないように思います。

**中尾** そうしますと、2021年のこの前の段階で、やはり学生がよく知っているということでもなかったのでしょうか。

**中井・大倉** そうですね。

## 3. トランスジェンダー女性の受け入れ議論

### (1) 受け入れ議論の契機

**安東** 今、日本女子大学のトランスジェンダー学生の受け入れまでの経緯をまとめたもの<sup>6</sup>をお配り

<sup>4</sup>セクシュアル・マイノリティのパレードイベントで、彼/女らに対する差別や偏見に抗議し、性の多様性を祝うパレードや関連行事を指す。世界の主要都市で開催されている。https://ideasforgood.jp/glossary/pride-parade/(2024.4.11)

<sup>5</sup>1998年、性同一性障害診療を行うため岡山大学病院にジェンダークリニックが発足し、今日まで性別違和の悩みをもつ患者に対応するため診療を行っている全国屈指の医療機関。精神科神経科、婦人科、泌尿器科、形成外科が協力し合い、総合的な診療を行っている。https://www.okayama-u.ac.jp/user/g-clinic/(2024.8.31)

<sup>6</sup>安東由則 2023.「日本女子大学におけるトランスジェンダー女性受け入れ決定に至る経緯と迎え入れ準備ー小山聡子教授らへのインタビュー調査からー」『研究レポート』(武庫川女子大学教育研究所) 53号、1-25頁。

しました。日本女子大学の場合、トランスジェンダーの子ども（当時小学5年生）を持つお母さんから、附属中学校への入学について問い合わせがあったことから受け入れの検討が始まり、その後、大学でトランス女性の入学検討を引き受けることになりました。それが2015年末～2016年のことです。お茶の水女子大学では、トランス女性から受験についての問い合わせがあったと聞いています。貴学においては、附属や姉妹校の中学・高校が広島と岡山にありますが、中学や高校でも大学でも、トランスジェンダー女性やその家族の方などからの問い合わせはなかったのでしょうか。

**大倉** 非公開になっているかもしれませんが、特になかったようです。ただ、そういうことがあれば、職員間で話し合いをするので、正式な問い合わせはなかったと認識しております。

**安東** 貴学では2021年から検討を始められていますが、日本で女子大学へのトランスジェンダー女性の受け入れが社会的関心事となったのは2017年頃です。朝日新聞に日本女子大学のシンポジウム記事が掲載され、その後、各女子大学に新聞社からアンケートが送られてきたと思います<sup>7</sup>。その頃から、女子大学へのトランスジェンダー女性の入学についての議論が始まりました。さらには、女子大学連盟などの集りでも、このトピックが2年ほど連続で議論されたと聞いております。このような新聞報道をきっかけに、強い関心が生じ、受け入れについて検討を始めるといったことはなかったのでしょうか。女子大学連盟には、貴学も参加されていると思うのですが。

**小林** 今回、津田学長からお話がある前に、学長諮問会などの大学執行部内の会議で、宮城学院女子大学の事例などの報告があったことが契機であったと思います。

**安東** それは、いつ頃ですか。

**小林** 本学の委員会が発足（2021年）する少し前くらいでしょうか。それまではありませんでした。

**大倉** 本学の理念として、LGBTQなどセクシャルマイノリティの方だけでなく、成績なども含めていろんなことで悩んでいる学生を誰一人も絶対に取り残さないというのをスローガンに掲げており、教職員もそういう感覚でおります。女性職員のほとんどは卒業生ですし、入学したときからカトリック信者でなくとも、キリスト教学などの勉学を通して、カトリック精神や、本学の理念を自然と受け入れている、そういう力を養ってこれたことが、一番だと思います。

津田学長（理事長兼務）も本学の卒業生で、シスターでもあります。どのような場合でも、誰一人取り残すことはよくない、救っていかなければならないという理念を、我々教職員は自然と受け入れていると言いましょか。

日本私立学校連盟か女子大学連盟の席でそういう話題になったとき、「じゃあ、ぜひ本学もそういうことしなければ」ということが契機であったかと思います。

**中尾** そうしますと、経年表に本保副学長が提案されたというふうにお書きくださっているのですが、津田学長発信のアイデアだったということでしょうか。

**大倉** もとはといえばそうですが、学長がそれを導入してはどうかと副学長の方に向けられたのです。本保副学長も本学の卒業生で、児童学科の教授として障害児教育を専攻しております。その導入は大変いいことであるし、当たり前のことではないかということになり、まず具体的に何からすればいいかということで、委員会が必要だとなりました。そういうことで委員会を立ち上げ、今に至っています。立ち上げから間もないですから、まだまだこれからという話ではありますが、世の中がそういう形になってきているので、賛否両論あるかもしれませんが、とりわけ誰からも

<sup>7</sup>氏岡真弓・杉山麻里子「『心は女性』女子大入学可能に？日本女子大検討へ」『朝日新聞』（2017年3月10日朝刊）、同「『心は女性』学生の受け入れ 女子大8校が『検討』」『朝日新聞』（2017年6月19日）など。

猛反対であるとか、そういう声は上がっていません。

**安東** 2021年11月1日には受け入れ委員会を発足させています。教授会での了解は取られたでしょうか。

FDなどが始まり、翌年の2022年5月にトランスジェンダー女性受け入れ決定の報告が教授会で行なわれています。それまでに教授会などで、この件についての経緯説明はあったのですか。

**小林** 受け入れ委員会の発足については、学内で公表しています。その後、FD研修会で中塚先生（岡山大学）の講演を開催するなど、下準備ではないですが、このようなことについて理解をしてくださいということも行っていました。当時、委員会の議事録は出さなかったですね。（土師 確認、同意）

本学は基本、全ての議事録もしくは議事要旨を学内で公表することにしていますが、少しセンシティブな問題も含まれているので、この経年表の中で公表はしておりません。基礎的な土壌が既にあったので、第2回の教授会で報告のみということで決定をしています。

**中尾** トランスジェンダー受け入れに限らず、学長ないし副学長からの発信はよくありますか。

**小林** いろいろなタイプがあります。基本的な規則でも、原則、学長のイニシアチブでなされます。教授会は、諮問機関なので学長が教授会に意見を求めて審議をいただくこともありますし、評議会で審議を求める、両方でお互い行うこともあります。学長諮問会で、学長が意見を求めて審議をして、それで学長が決定されるということもあります。決定した場合、その後、評議会や教授会で報告することになっているなど、いろいろなタイプがあります。

**中尾** そうなんですね。特に反対意見ですとか不安を述べられる方はおられなかったのでしょうか。

それとも、一部の先生方の間で、もうちょっと時間かけたほうがよいであるとか、そういう意見も聞こえてこなかったのでしょうか。

**大倉** 委員会の中では、そういう意見交換もしております。既に委員会の中でも最悪の状況や、このような場合はどうなるのかということも十分に議論した上で発足し、実行しようということになりました。問い合せがあれば委員会のメンバーでお答えできる準備はできているつもりはありました。

私学ですから、最終議決機関は理事会になります。ベースは実際やってみないと分からないというのがやはり正直なところではないでしょうか。確かに委員会では、まだまだこれから吟味しなければいけないことがあります。どういうふうに周知徹底していくべきか、もし本当に受け入れが決定した場合、急に投げ出すわけにいかないので、それをどう事前に学生や教員へ浸透させていくのか、職員がどうサポートしていくのか、などです。これからやらないといけない検討事項は、女性学を専門とする学部長がリードしてくれています。いずれにしても、慎重に扱っていかねばならないことは言うまでもありません。

**安東** 貴学の場合、他の女子大学と違って、議論が始まるのが2021年で、1年半後の2023年から受け入れという短い準備期間でした。これまで受け入れを発表した女子大学は割と早くから議論を始められていますが、貴学は少し遅く始まった印象があります。

**小林** これは今の学長の方針なのです。2017年から2021年3月までは原田神父が学長をされていた時期で、津田理事長が2021年に兼務で学長にご就任されてから始まったのです。

## （2）カトリック教会によって設立された大学であることの影響

**安東** 今、カトリックの精神という言葉されましたが、カトリックでは、ある意味、生まれながらの性別の変更については、厳しい対応をするという印象を私はもっています。アメリカではプロテスタントの大学の方が、受け入れを早めに決めたということもありますので、宗教的な理由

で躊躇するようなことがあったのかと思いますが、この点についてはいかがでしょうか。

**大倉** 本学は、あるいは本学園はと言ったほうがよいかもかもしれませんが、現在のローマ教皇様のお心に沿っています。前のベネディクト（Benedict）教皇様は絶対に同性愛は認めない教皇で、そういう方々が結婚式を挙げてはいけないというのは、つい先頃まで公約されていたと思います。ただ、今のフランシスコ（Francis）教皇様は、それを許すべきだ、受け入れるべきだというお考えだと伺っております。ローマ教皇様が仰っているからということではありませんが、ただ、そういうふうにかトリックの中でも意見がすごくいろいろあるということは伺っております。

**安東** 日本には聖心女子大学や藤女子大学など幾つかカトリック系の女子大学がありますが、貴学は受け入れを早く決定されたので、そのあたりの経緯をお聞きしてみようと思いました。

### （3）受け入れ委員会のメンバーとガイドラインづくり

**安東** 次に受け入れ委員会について伺います。どういう方がメンバーになられたのですか。

**小林** 最初は、それほど構成員はいませんでした。教学担当副学長（本保教授—当時）と協議して、委員としては各学部長（文学部と人間生活学部）と中井先生、施設企画管理部長の大倉さんが入り、事務局として土師さんが入るところからスタートしました。その後、本学にはインクルーシブ教育研究センターという学生相談室といろいろなものが包含されているセンターがあり、その先生を加えるべきだということで、2022年6月1日に青山新吾先生<sup>8</sup>が追加で入られました。さらに、本保副学長が退職いたしましたので、本年（2023）4月から、私も副学長として加わり、この体制になっています。今年度（2023）は開催しておりません。

昨年度（2022）、私が学務部長として入ったときには、受け入れ委員会でガイドラインを決めるという話し合いが一度ありました。その後、ガイドラインの策定を行い、そのまま議を経ていくという感じでした。現在、委員会では、入試広報等に問い合わせ事項があるかないかというような議論はしています。ガイドラインについては、その後、委員会で議論してはおりません。

**安東** これまで、宮城学院女子やお茶の水女子、奈良女子でも受け入れガイドラインをつくり公表しています。貴学では、どちらの女子大学の取り組みを参考され、議論をされたのでしょうか。

**小林** 宮城学院女子大学のものがメインになっております。当時の委員長たちが、いろいろな大学から情報を得ようとしたらしいのですが、基本、開示いただけなかったようです。例えば、（トランスジェンダー女性の学生が）今いらっしゃるんですか、どういうルールになっていますかといった具体的な問い合せもしたらしいのですが、ほとんどお答えいただけなかったとのことでした。ですから、宮城学院女子が出しているものをベースにしながらか作ったと聞いております。

**中井** そうですね、参考にさせていただいたのは、それプラス、お茶の水女子と奈良女子、日本女子を参考にさせていただきながら、たたき台を作りました。

**大倉** 何しろ先進の女子大学が少ないです。どこまで公表していいのかということもおありでしょうから、どの大学も対応が難しいですね。宮城学院女子やお茶の水にはオープンに対応していただきました。

## 4. 学長のリーダーシップによる受け入れ準備の推進

**安東** もう一つお聞きしたかったことは、議論から受け入れ実施までの期間についてです。去年

---

<sup>8</sup> 人間生活学部児童学科准教授でインクルーシブ教育研究センターのセンター長。専門はインクルーシブ教育及び特別支援教育で、『エピソード語りで見えてくるインクルーシブ教育の視点』（2022年、明治図書）などの著作がある。

(2022)、日本女子大学へインタビューに行ったのですが、受け入れについて学内での議論がいろいろあり、結論を出すまでにかなり苦勞をされています<sup>9</sup>。それに対して、貴学の場合は非常にスムーズに決定して、ガイドラインを出すところまで進めておられます。これまでお話を伺い把握できる部分もありますが、これほどスムーズに進んだのは、やはり強い学長の意思、リーダーシップが大きいということですか。

**小林** それは大きいと思います。これが本学のベースでもあります。先ほど大倉から申し上げましたが、やってみないと分からないところも出てきます。今回、まだ会議は開いていませんが、ちょっとしたことはいろいろあります。受け入れないという人はほとんどいないと思うのですが。

学生や教職員に、いろいろな形で周知を継続的にやっていかなければと考えています。今回も、FD研修のときに動画を取り入れていこうと思ったのですが、中塚先生の話にもあったようにトランスジェンダー受け入れの流れも日々刻々と変わります。前副学長に動画を作っていただいたのですが、表現一つを見ても、「これ今ちょっとどうかな」という箇所が出てきたりするなど、同じことに対しても理解がどんどん変わってきています。中塚先生の講演を、何回か聴講しに行きましたが、同じ事象でも、この表現は逆に誤解を与えるんじゃないかといった意見は結構あると感じました。

今年度中にFDとして1回実施する予定でしたが、今ペンディングにしている、少し違うやり方で行なおうと思っています。やはりトランスジェンダー女性の当事者に来ていただいて実施した方がいいのではないかとといった議論をしています。ただガイドラインはあるのだけれど、学問的にも日々刻々進展があるので、アップデートをどうするか考えなければいけないと思います。

**安東** 難しいですね。

**小林** すごく難しい。ガイドライン制定は学長イニシアチブで立てましたが、受け入れるという方針は、もうこの社会の情勢から考えても揺るがないと思います。その中で、内容については個々に変更していかないといけない部分が出てくるという感じはしています。

**中尾** 性同一性障害の名称が性別違和になるなど、ちょうど大きく変わったときですね。

## 4. 受け入れ決定後の学内準備とその難しさ

### (1) 受け入れ決定の学外発表とその反応

**安東** 学内で受け入れが決まった後の周囲への説明について伺います。学生であったり同窓生であったり保護者であったり、周囲の皆さんへの周知ということについては、何か特別にされたりしましたか。あるいは、その反応はいかがだったでしょうか。

#### ・学外からの反応

**小林** 基本的には教授会で報告し、ホームページでの発表やプレスリリースをしていますので、周知のやり方としてはそんなところですね。個別に同窓会で説明をしたというわけではありません。プレスリリースで十分でしょうということです。問い合わせもありますので、それに対応していききました。

**安東** どのような問い合わせがありましたでしょうか。

**小林** プレスリリースに関しての取材などです。マスコミの取材等は、基本的にプレスリリースをした後、原則受ける方向で対応したようです。先ほど新聞でお見せしたような学長の記事もありま

---

<sup>9</sup> 小山聡子他 2024. 「日本女子大学におけるトランスジェンダー女性の受け入れ決定に至る経緯と迎え入れ準備」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）54号、1-25頁。

すし、前副学長も対応しております。今年（2023）度に入っても何件かあったのですが、基本的にはホームページにガイドラインを公表しており、それ以上申し上げることはないという形の応答をしています。

**安東** SNSの中で、ある団体からの反対意見も出ていました<sup>10</sup>。

**小林** 一部外部団体から、ネットを通じて抗議のようなものがありました。それにも、返答をしようということで返しました。

#### ・入試に関する問い合わせ

**安東** 言える範囲で結構ですが、入試に関する問い合わせなどはありましたか。

**大倉** 質問はあったと伺っています。具体的には、すぐに受験したいという学年の方ではなく、記事を見て本当に受け入れてもらえるのかといったお問い合わせだったようです。実際に事が動き出したら、すぐ委員会も動きまわすし、施設もこういうふうに変えろという指示も来るでしょう。今のところ具体的なことは伺っておりません。

#### ・同窓会からの反応

**小林** 同窓会の方からは、一部、意見があったようですね。

**中尾** 差し支えなければ、卒業生の方からどういうご意見であったかお聞かせください。

**土師** 今回の決定については受け入れ難いというものです。

**大倉** 実は先般、プチ同窓会がございまして、その話題になりました。卒業生からの問い合わせというか、ざっくばらんに談話するという席で「女子大学でなくなるの？」と尋ねられました。戸籍は変わらないので、男性が一人でも入学すると女子大学ではなくなるのかという質問です。

**中尾** それには、どのようにお答えになられたのですか。

**大倉** 「もちろん女子大学のままです。」とお答えしました。

**中尾** そういうふうにおっしゃったのは、お一人だったのでしょうか。

**大倉** たくさん集りましたが、発言されたのはお一人だけでした。他の方もトランスジェンダー女性の受け入れについて知っていました。卒業生はホームページをすごく楽しみにしていますので、「こういうのが新たにできるよね」、「こういうことになったのね」などよく見てくれています。

#### ・学生への説明や啓発活動

**小林** さすがに全く意見がないということはありませんでしたが、学生からはとりたてて出てきてはいないです。

**安東** 学生を対象とした説明会などは実施されましたか。

**小林** 今年度、学生にも実施しようとは思っていたのですが、まだ行なっていません。当然、FD・SDやいろいろな啓発活動を通じてやっていかないといけない部分もあります。先ほど申し上げたように、様々な動画を細かにチェックしていき、全ての委員に見ていただいた中で、「その表現等を慎重に考えたほうがいい」、「ちょっと誤解を生じさせるような表現もある」といったご意見があり、少し違った形にしないといけないと考えています。意見だけ伺って、すぐにFDで動画の公開というのは、今年度はやめました。いずれその部分を整えてFD活動などを行っていきます。あとは、学生にも流すという予定だったのですが、そこも準備が整っていけば、授業の中でやってもいい、やるべきかと思っています。

---

<sup>10</sup> 「No！セルフID 女性の人権と安全を求める会」が、「ノートルダム清心女子大の「トランスジェンダー学生」受け入れに抗議します」とのタイトルで、大学に送付した抗議文（2022年6月25日付）と、ノートルダム清心女子大学からの回答文（6月30日付）を掲載している。<https://no-self-id.com/2022/06/24> (2024.4.11)

僕の個人的意見を申し上げますと、中塚先生の話や講演を聞いて思ったのは、実は学生の理解の方が進んでおり、遅れているのは教職員ではないかということです。学生は小・中・高で実際そういう生徒がいるし、カミングアウトしている者もいて、それに対応してきた。高校の先生の対応もちゃんとできている、できつつあるので、学生のほうがそれに対する対応力がある。僕個人の立場としては、実は学生の問題というよりは、学生を指導したり支えたりしていく教職員の理解をしっかりとさせていけないといけないという思いがあります。

**安東** 例えば、スポーツクラブの場合、トランスジェンダーの学生をクラブに入れるのかどうか、どのような形で参加が可能かの判断については、スポーツ団体によっても異なってくるでしょうし、もっと身近な課題としてはクラブハウスの使い方といったこともあります。クラブの学生が不安を持つというふうなことも聞くのですが、そのあたりについてクラブ側から何か意見は出されていませんか。

**小林** 今のところはないですね。もしあれば、それに応じた対応を取っていきます。

本学ではコロナの影響でクラブやサークル活動が、ほとんど壊滅に近いよう状況です。昔はほんとうに活発だったのですが、徐々に下火になっていきました。スポーツ系の学生もたくさんいるにはいるのですが、サークルに流れていってしまいました。そこにコロナで環境が一変し、今、学生活動を非常にエンカレッジ（奨励）している段階です。復活の兆しはあるので、今後、先ほどのような申出が出てくるのかもしれないですね。我々はそういうための委員会でもあるので、その時、その時で真摯に、現実的な対応をしていくということになるろうかと思えます。

#### ・難しい女性の定義——FDを通じて教員らの認識をどう変えるか

**小林** 本学の場合、他の女子大学とちょっと違うところがあります。例えば、武庫川女子大学では、大学院に男性を受け入れていますか？

**中尾** はい、受け入れています。

**小林** 本学では、大学院でも修士課程、博士課程ともに男性を受け入れていません。論文博士だけはオーケーなのですが、全て女子に限ると書かれています。ただ、その女子の定義が何か難しい時代になっています。今の時代、女子の定義は何だと言われるとほんとうに大変になります。

多様な学生、多様な女子を受け入れないということは、つまり、Y染色体を持っているものは受け入れないという表現を使わざるを得なくなります。そのような表現は使うわけにはいきません。それが認められるような社会的情勢ではないわけです。また学長がお考えになっている「多様な女子」の考え方を尊重していくことは、フランシスコ教皇のお考えも踏まえてということになります。

今日か昨日か、BBC かどこかのメディアで、司祭が同性カップルを祝福することをローマ教皇が承認したというニュースがありました<sup>11</sup>。そういう例から考えても、カトリック教会的にも、これを否定するわけでもないだろうということで、今、落ち着いているところかと思えます。

**安東** そうしますと、やはり鍵になるのは教員ですね。武庫川女子大学でも私を含め年配の教員もいますので、学生指導をするのでも、教員がどれだけこれについての認識をもっているかが問われると思います。FD 等も実施されるとのことですが、どのようなことをされてきましたか。

<sup>11</sup>BBC News Japan, 2023 年 10 月 3 日「ローマ教皇、同性カップルへの祝福を容認する発言」(<https://www.bbc.com/japanese/66991524>)。さらに、2023 年 12 月 19 日「ローマ教皇、同性カップルへの祝福認めると宣言」(<https://www.bbc.com/japanese/67757415>)。後者の原文は、BBC News, 2023 年 12 月 19 日「Pope says Roman Catholic priests can bless same-sex couples」(<https://www.bbc.com/news/world-europe-67751600>)。2024.10.30. accessed

**小林** FDは1回で、中塚先生だけです。その後は行なっておらず、もう1回今年しないといけないと言っているところです。今、ペンディングになっており、早晩行なっていけないといけないなという感じです。今年度もう一つインクルーシブ関係のFDも行う予定だったのですが、それもいろいろな形でペンディングになっており、できれば来年度には、ちゃんと統一した形で、FD活動の中で反映させていけないといけないと考えています。

## (2)「ガイドライン」作成と記載内容の検討―なりすまし対応と事前相談の呼びかけ

**安東** 受け入れが決まり、ガイドラインが作成されましたが、拝見したところ、宮城学院女子大学のものがベースになっているかと思います。その中に「なりすましが分かった場合は退学」という文言があります。宮城学院女子大学の場合、この文言がちょっと引っかかるということが指摘されています。なりすましとそうでない人をどうやって見分けるか、退学という処分でのいいのかどうかといった議論などはなかったでしょうか。

**大倉** 最初の委員会で、ガイドラインを作らないといけないという話になり、意見交換をして、最悪の状況も考え、議論してきたのはこの委員会です。対面で意見が集まらなくとも、学内<sup>12</sup>で流されたものに対して意見を入れていくといったことは結構行っています。先生方や学生から意見は特に何もありません、委員会の中でどンドン練り直していつている状況でした。「こうなった場合、じゃあどうするのですか」といった感じです。

中井先生がしてくださったのですが、ガイドラインを作るとき一番問題となったのは診断書を取るか取らないかの議論だと記憶しています。今のところ、取らないことにしております。

**安東** 宮城学院女子大学は事前に診断書や関連書類の提出は求めず、配慮が必要な方には事前相談を呼びかけるにとどめました。お茶の水や奈良女の場合は、少し異なり、事前に面談を行なうことにしていますし、奈良女子大学ではこれに加えて、その方がトランスジェンダー女性として生活をしていることを示す書類を出してもらおうということになっていたかと思います。高校の先生であるとか、保護者などに書いてもらえば大丈夫ということですか。

**大倉** ただ、カミングアウトをしているか否か、これが大きなことです。高校まで、親にも誰にも言えず、ほんとうに死と背中合わせの状況で、子どもの頃から自分の中で押し殺してきた人もいるのではないかと、そういうケースも多いのではないかと考えました。診断書の提出を要求するならば、何のために今までカミングアウトをせず頑張ってきたのかということに立ち返るべきではないかとの議論もありました。一方、何か事が起きて、なりすましだったでは遅いので、証拠となる誓約書など何かを持っておかないといけないのではないかとといった意見交換は随分ありました。根本的な方針としては、まずは信じようじゃないかというところに落ち着きました。

その前に、本人と念入りの面接であるとか、意見交換は当然するつもりでいます。女子大学に入ることが目的の確信犯で、女性を装った男性がもし来たらとの懸念もありますが、そこは今後、教職員の中で周知徹底していこうと思っています。公表するかどうかは分かりませんが。

学生が動揺しないで普通に生活できるよう、当事者の方が心地よく毎日を暮らせるよう対応策をどうすべきか。それには、学内だけで考えるのではなくて、先行する大学のお力も借りながら、勉強しながら進めていこうと思います。小林委員長が申し上げたとおり、スタートを切ったばかりなので、これから日々研鑽すると言ったほうがいいでしょう。知識もやっと追いついたと思ったら、状況が変わったりする昨今ですから、それに追いついていかねばならない状況です。

<sup>12</sup> ノートルダム清心女子大学の学内のネットシステムで、スレッドを使用した会議等の実行が可能。

**安東** 必ず提出しなければならないものは特にないですか、あるいは面接は必須なのでしょうか。

**大倉** 一般入試だと出願書類だけで、面接は特にごさいません。例えば特殊な病気をもっている方や誰かの力を借りないといけないという場合には、設備であるとかを承知の上で受験していただかないといけません。今も、車いす利用学生を受け入れるとき、オープンキャンパスなどで、ご自身が学内を見て生活できるかどうかだけでなく、「こういうこと、ああいうことは困るけれど、その点は大丈夫ですか」という話を事前に行っています。もちろんご本人からそういう申出があったりする場合は、入試広報部などで対応をしていくという考え方です。

**安東** 必須の提出物は、トランスジェンダーの方に限っては、特にないということでしょうか。

**中井** 基本的にはないですね。1ヵ月前までに申し出をしていただくということが必須です。受験をする前に申し出をいただいて、委員会の中で協議をすることを条件化しています。ステップを踏みながらということで、特に必須の書類を用意してもらうことはありません。

**安東** 申し出の際に伝える内容としてはどのようなものでしょうか。

**小林** 「私はトランスジェンダーです」と、まず入試広報部に連絡してもらいます。そこから委員会などでいろいろな話し合いをもつ中で、最終的に委員会で協議をして受け入れるかどうかの決定を行いますので、本人とのコミュニケーションが一番の肝で、重視されるということです。

**安東** 受験希望者から何らかの情報を得て、それを基に議論するということですね。日本女子大学の場合、学校や家庭などで一貫してトランスジェンダーとして生活してきた証拠が、親からでも教師からでも得られれば、それを提出する形だったと思いますが、貴学ではそこはないのですか。

**小林** 一応、ガイドラインはあるのですが、その辺のところは書いていないです。書いていなければ要らないかということ、コミュニケーションの中で、例えばそういう書類をお出しになりますか、などといった対応ができるようにしてあるということです。

**安東** そのあたりについては、ちょっと曖昧にしてあるというような感じでしょうか。

**小林** インクルーシブの対象となる子たちもそうですが、一人一人まったく対応が変わってきます。本学でも普通に障害をもたれた学生を受け入れています。人によって対応が異なります。授業での対応も違うので、一人一人テーラーメイド (tailor-made) で授業設計もしています。今回のことを、そういう面と一緒にしてしまったら駄目なのですが、今もそういう状況の人たちを入試広報部で受け、各部署と綿密なコミュニケーションを取りつつ、最終的に受け入れています。受け入れた後、学務部では、当該学科の先生たちと一緒にどういうケアの方法を取るのがよいか考えているのと同じ対応かなといったところですね。

“マニュアルではこうだ”とするより、一人一人の面談と情報の申告、それに対するコミュニケーションで、その人に合った授業設計を築いたほうが良いと考え、少しアバウトな記述<sup>13</sup>にしているということです。

**安東** 相手に負担をかけないということも、もちろんあるでしょうし。

**小林** どういう状況のトランスジェンダーの方かによって恐らく個別の対応となり、一人一人全く違う対応になってくる。本学で今まで受け入れてきたインクルーシブ対応が必要な学生、障害を抱えた学生の受け入れ方とも同じ形になるかと思います。一人一人ケアをしないといけない学生ということでは変わりがない。本学は大規模の大学ではありませんので、手厚い指導をこれまでも

---

<sup>13</sup>2022年5月11日制定の「多様な学生(トランスジェンダー女性)受入れガイドライン」の「1.受入れと入学後の対応」に“出願登録期間の1か月前までに入試広報部に連絡が必要です。入学後の対応措置が必要な場合は、当該者と多様な学生受入れ委員会が協議して対応します。”とある。

ずっと行ってきた経験があります。そこまでマニュアル化する必要はないかとは思っています。

**安東** 少し違う面から見ていきますと、例えば、フルイド (fluid) と言われる自分の性自認が揺らぐ方は、女性から男性へと性自認が変わってしまうわけですが、このガイドライン見ると、入学した以上はそれも認めると書かれています。そうであれば男性が在学するということにもなりますね。この点の整合性については、どう考えられていますか。

**小林** 本人の判断ですので、揺らぎが起きるのはもう当然なことですね。本学の場合、揺らぎがあったとしても退学になることはありません。でも、本人が揺らぎで男性に戻ったとき、逆に本学にすることがつらくなってくることもあります。当然、教職員がいろいろ相談に乗りながらケアをしていきますが、本人がつらくなって、楽になるために無理に退学をさせることはしません。しかし、本学の授業システムを受けていくのに、本人がつらくなったのなら、退学という選択肢も与えているという認識でよいのかと思っています。

### (3) トランス学生に関する学内の情報共有

**安東** トランス女性が入学されたとき、この情報はどの範囲の教職員に共有されるのでしょうか。

**小林** インクルーシブと同じですね。いろいろな特別配慮が必要な学生から特別配慮申請がなされていて、基本的には全教職員に流されるわけではありません。特別配慮を受ける科目の先生にのみ共有されることになっており、当該学科やその授業に関わるのところまでかと思います。トランス学生についても、それと同じ適用をしていこうと考えており、敢えて全学で情報を共有することは考えていません。

**安東** やはり教員の認識が問われてくる場所ではあるとは思いますが。

**小林** ジェンダー問題は別として、今でも本当はかなり多様な状況を抱えた学生が入学をしてこられているのが現状です。先ほど申し上げたように、本学では本当にテラーメイドな形で対応しています。例えば、A学科にそうした学生がいて特別配慮を求めているも、B学科の先生は知らない。ただ、全学共通の科目を受けて配慮が必要な場合、その当該科目の先生たちには連絡がいき、それ以外の先生は分からないですね。

**安東** 体育など身体を使う科目であれば当然伝えるかもしれませんが、一般的な講義であれば、知らせる必要がないかもしれません。どの授業の担当教員には知らせるのか、そこら辺の判断ですね。

**小林** 実際のところ、今でも必ず当該科目だけ特別配慮の人たちを知らせているかという点、現実的にそうではありません。例えば、C学科の学生の場合、学科全体で当然共有してもいいですかと学科から申出がありました。個別の教員だけの共有だとケアがしにくいので、ここまで出してもいいですかという場合、いいですよという形でお話をするのは当然あります。その辺のところもケース・バイ・ケースで対応するしかないのかと思っています。

**安東** 当事者が、どの範囲に知らせてほしい、これについては嫌だということについても、確認されるのかなとは思っています。

### (4) 教員のアドバイザー制度によるきめ細かな学生対応

**大倉** 本学特有なものかは分かりませんが、アドバイザー制度<sup>14</sup>が設けられており、アドバイザーは

---

<sup>14</sup> 大学 HP には、アドバイザー制度として次のような説明がなされている。「在学生の一人ひとりに対して、所属学科の専任教員が1名、アドバイザーとして対応します。学生は、勉学や学生生活の全般に関係する種々の問題について、アドバイザーに相談することができます。」<https://www.ndsu.ac.jp/life/support/adviser.html> (2024.4.11 参照)

教員となっています。お話ししている中で、こうした対応がなぜ可能なのかというと、一つの要因はひとえに小規模な大学であるからで、これが最大の長所です。全学2,000人と、こじんまりしているからこそ、一人一人に目を行き届くさせることができるのです。

もう一つは、教員、職員が、どの学生ともすごく近い位置にいること。これはびっくりされます。よく学生から、高校の担任の先生より面倒見がいいと言われ、高校同様に担任の先生がいるような感じもあります。私どもが学生の頃からそれは一貫しており、すごくおせっかいかも知れませんが、学生は迷惑しているのかもしれませんが、学生に声をかける教職員が多い大学だと自負しております。それはひとえに少人数だからできるというのはありますね。

**小林** 本学のアドバイザーとその学科長はもう大変です。例えば学生へのケアの必要性のことで親御さんと、夜8時、9時までやり取りをすることもあります。正直なところトラブルもあります。対応の調整も含めて、アドバイザーと学科長が全部やるんです。それでほとんど親御さんも納得していただける形でお嬢さんを預けていただいている形になっていると思っています。

ある意味、見切り発車的に（トランスジェンダー学生の）受け入れを始めてもやっつけられるのは、このようにやっつけられる土台があると信じているからです。相当なケア・システムを十分に担保している経験があるので、何とか大丈夫であろうということと、先述のように日々刻々変わっていく状況の中で不断の研鑽をやっつけいかねばならないというところです。あとは、学生のほうが先に進んでいることを考えても、ある種、受け入れを見切り発車したとしても対応できるだろうことは、今でも変わっていないですね。

**安東** やはり信頼感が大事ですね。

**小林** それを醸成するのがすごく大変です。大学が少人数だということと、教職員と親御さんまでが密接であることが可能にしているかと思えます。ただし親御さんがコミットしてくれればですが。

インクルーシブ教育研究センターもあるので、親御さんはセンターが受けもち、学生本人は学科長やアドバイザーが受けもってもらうなど分担しています。でも、センターが後で情報を全部集約して、ハンドリングしていくようにしないと、情報が錯綜してしまいます。ですから今でも、テーラーメイドでやっています。今は、青山先生というインクルーシブに関わる専門家がいらっしゃるので、そこに情報を集約していくような形で、青山先生や中井先生などの意見をいただきながらやれば、基本的には今の体制で十分やっつけられるということで進めている感じです。

**安東** インクルーシブ教育研究センターは、いつ頃できたのですか。

**小林** 2020年だったように思います。もともと特別教育支援センターがあり、今もある児童臨床研究所などを前身として、それぞれの役割をきちっと整理し、分離していった感じです。児童だけでなく、在学生はもちろん、学外からの相談も担当する機関として立ち上げました。

**大倉** 学生相談センターや保健センターとも密接な関係をもっていますね。

**小林** あとはアドバイザーたちが、学科の要望を聞いたり、こういう学生がいますよという情報交換を行ったりしています。今までは、学務部などいろいろな部署が別個でよかれと思って動いてきたのですが、今、集約をしているところです。特別配慮に関しても、インクルーシブ教育研究センターに諮問をして学務部が答申を受け取る。学務部が受け取っても、そのセンターに情報を通すなど、アドバイザーも全部知った上で行っています。

逆に言うと、特別配慮の場合、「これは特別配慮になりません」ということもあります。他の学生が受ける授業において公平性を担保する必要がありますので、これは特別配慮するべきでないとの答申も返ってくる場合もあるのです。今、体制も整ってきて、実際それが動き始めているところです。これにトランスジェンダーへの対応が出てきていますが、そういうことを考えても

対応可能だと思います。

**安東** トランスジェンダーの場合も、やはりこのセンターを通してということになりますか。

**小林** そこはルールづけをしているわけではありません。ただ、共有しますので、インクルーシブ委員会のメンバーにも入ってもらったりします。

## (5) 学内制度や組織等の準備・改編

**安東** 受け入れが決まってからの、学内制度であるとか施設、組織の改編についてお尋ねします。トランスジェンダー女性の受け入れとなると、学籍簿、通称名称や学位記の記載名などを含め、変えていかねばならない点は多々あると思いますが、こうした対応について教えてください。

**大倉** もともと通称名の制度はあります。親御さんが離婚されたけれども、家庭環境のことを友達に知られたくないので名前を通したいなど、様々な状況があります。外国籍の方で、日本名を使いたいという方もいます。学部に出があり、そこで通称名として認められるかどうか決めます。我々には守秘義務がありますので、そこはがっちり固めて4年間それで通します。

学位記については問題もごさいます。学生は学位記の名前もこれで通させてほしいと言うのですが、例えば食品栄養学科の学生が管理栄養士の国家試験の申込みをする際に、戸籍謄本を添付しなさいということの不整合が起きる可能性があります。そういう場合、学務課から役所に問い合わせをするのですが、地方によって謄本がなくても受け入れるところと、それでは困りますというところがあるのです。本人を呼んでその情報をフィードバックします。「管理栄養士の資格を取ろうと思えば、こういうのが合っていないといけないんだけど、願書だけでもその名前というのは駄目かな」とか、そういうような形で相談しながら進めていきました。10年も前から通称名制度はありました。この点は固めているので、問題は特にないと思います。

**安東** 学則等、規則の変更というのは、特にはないということによろしいですか。多目的トイレであるとか施設の変化の他に、何か変わったことはありますか。

**大倉** 今、私は施設の担当をしていますが、早くから「更衣室が課題だ」との指摘がありました。体育館の中に何名分かの更衣室はありますが、それは共同の更衣室で、個々の扉がきちっとしておらず、「女性同士なので大丈夫でしょう」みたいな更衣室なので、とても対応できません。

では、特別にそういう更衣室を設けているかという、今のところ設けていません。この点は「みんなのトイレ」で考えていただきたいということです。今までの多目的トイレを「みんなのトイレ」に変更したので、一部、不自由なところもあります。そういうこともあり、建設している新学棟の「みんなのトイレ」に、着替えられるようフィッティングボードを置くようにしたり、女子トイレ内に1箇所ですが更衣室も設ける予定です。

ただ懸念するのは、今年でしたか、公的機関の職場のトイレ使用のことで裁判になり、結局、トランスジェンダー女性ご本人の訴えが勝った事例もごさいます。

**安東** 経済産業省官僚の裁判<sup>15</sup>ですね。

**大倉** そのようなことが起こったときにどうするかは、まだ検討しておりません。「みんなのトイレで着替えてください」というのが既に差別じゃないかという議論だったと思います。「なぜ私がそこへ行かなければならないのか」、「女子なのだから女子トイレに行って何が悪いのか」。結局、

<sup>15</sup>2023年7月11日、最高裁判所第3小法廷は、性同一性障害と診断され、女性として社会生活を送っているトランスジェンダーの経済産業省職員が、職場の女性用トイレの使用を制限されているのは不当だとして国を訴えた裁判において、トイレの使用制限を認めた国の対応は違法だとする判決を言い渡した。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230711/k10014125111000.html>

裁判で勝ったのは当事者の主張でしたので、事前に委員会で考えておかないといけないでしょう。トランス女性受け入れの際、事前に、「そういう更衣室がないので“みんなのトイレ”で着替えていただきますがいいですか」との問診などは当然していかないといけないと思っています。

1人を取るのか1,999人を取るのかという問題ではありません。施設の説明のときに、差別はしておりませんが、ただ区別は必要ですとよく申します。できる、できないは当然発生してくるのですが、決してそれは差別ではありません、と私はよく説明します。

今後、当事者が希望して、どんなところでもいいから更衣室を作ってくださいというようなことがあれば、実現不可能なことではないので、学長からは、すぐにつくりなさいという指示が来るのではないのでしょうか。そういう心構えをもって委員で常に検討していくかと思います。

## (6) トランス学生の学外実習や就職への支援と職員を含めた相談への対応

**安東** 今、学内のことを伺いましたが、学外対応で、例えば教育実習であるとか就職などいろいろありますが、学外への説明や対応という点では何かされていますか。

**小林** 学校や施設などに説明をして、受け入れてもらわなければならないですね。今でもインクルーシブ関係では当然、受け入れの説明をお願いしています。インクルーシブに関してはほとんど受け入れてくれています。ただ、食品栄養学科の実習は医療関係などもあるので、その辺のところは厳しくなります。公的病院であればいいのですが、民間病院になるとなかなか厳しい場合があります。教育機関は比較的受け入れてくれます。ある意味、実習担当の教員はそこも配慮しながら、ここはいけるというところに説明をしている。トランスジェンダーの場合も同じだと思います。

**中尾** 今、(トランス)女性の受け入れのこと聞かせていただいています、トランス男性の送り出しについてはどういった議論がなされ、どのようにお考えになっておられるのでしょうか。

**大倉** 今までそういう議論をしたことはないですね。

**小林** 多分、トランスジェンダーの学生はこれまでに一定数いたとは思いますが。ただ、これまでカミングアウトをしたり、申告をしたりしてくるといった事例がありませんでした。私見ですが、そもそもそういう話をする素地はないという感じだったと思いますね。ここは女子大学ですので、そもそも入ってこないという前提で。

**安東** 今の社会状況の中で、カミングアウトするということが今後は出てくるかと思っています。そうなったとき、大学側としてどう対応をするか考えておられたらお聞かせください。

**小林** 今までは言えなかったけれども、今後、違ってくると思います。今のところはそういう想定はしていないのですが、質問票を見たとき、そういうことも当然あるな、今までもあったらうなと思えました。そういう申出があった場合、この委員会で議論していくことになると思います。

**中井** もちろん、ガイドラインをつくる際にも検討はしました。今回は、そこを配慮するという方向性ではないだろうということで、具体的な事例が挙がってからのお話になると思います。今の段階では、事例が挙がればこの委員会の中で議論をしていくということで、それ以上、突っ込んでのやり取りはありませんでした。その人を何か特別視するとか、排除していくとかということではないというくらいのやり取りを、委員会の中でさせていただきました。

**安東** 性自認が男性に変わったからといって、学位記の記載であれ、手続的に障害が出ことは特にない。事例が生じた場合は今の体制で十分に対応できるということでもよろしいですか。

**大倉** そうですね。もしそういうことがあれば、恐らく当事者よりも周りの学生から申出があるのではないかという感じがします。「何となく様子がおかしいけれど、どうしたらいいでしょうか」、

「対応に困ってます」みたいな相談がくる雰囲気があります。それこそ、女子大学なので。

**中尾** 向こうから歩いてくる学生の姿を見たとき、その子の好みは、いわゆる女子学生の好きなものとは違うなという方はおられないのでしょうか。例えばすごくファッション的に男性寄りのファッションをしている学生であるとか。

**一同** いますね。

**中尾** 例えばそうした学生が、何か自分の性について相談したいときの窓口を用意されてたりはするのでしょうか。例えば、学生相談室が対応するだろうであるとか、ゼミ担当の先生が対応するといった認識は、教職員の皆様にはあるのでしょうか。

**大倉** ありますね、学生相談室がありますので。

**中尾** 学生相談のほうから、例えば件数まで詳細は言えないにしても、性に関するこういう相談が出ていますといった情報共有はされているのですか。

**大倉** 学生相談室が保健センターに紐付いており、その保健センターは学務部の中にあって、学務と直結しています。長が1人いて、その中に保健センターがあり、相談室があるという構造なので、常に連携は取れています。ただ、どこまでの範囲に知らしめるかというのは、学務部と相談室、専門の先生、アドバイザーと相談しながらやっています。

**中尾** 学務部の長がこの委員会の中に入っておられるので、事務長の理解が今回は反映しているということでしょうか。学内での学生の状況が、この委員会の中でどれほど共有されているか、もしくは理解された上で議論されたのかなと思い、尋ねています。

**大倉** ありがたいことに女性学やジェンダー論などの専門の教員が多くいます。それから中井先生や青山先生を筆頭に、活躍され経験をお持ちの先生が多いので、そういう方々の指示やアドバイスを得ながら職員は動いています。職員しか分からない情報については、すぐに相談するシステムになっており、どこかで止まってしまうことはあり得ないですね。そういう意味では動きが速い。

**小林** 私の前任が学務部長なのですが、たいがいの情報は学務部長に集約されてきます。ある意味、余計な情報も。当然、特別配慮になるか、ならないか、それから親御さんとの細々としたやり取りまで来ます。おそらく男性という自認が出てきたとの情報があれば、その情報共有がなされるはずで。相談ということに来て、どういうふうに対応したほうがいいかというのは必ずきます。今ではこの委員会があるので、こっちに回そうかという差配を学務部長の時にはしていました。すぐに対応できる体制はあると思います。

**安東** 職員が対象の場合も、このことは当てはまりますね。

**小林** 労務問題になってくると、当然、総務部長など身近なところに相談が行くようになるはずで、すぐに総務部に意見が集約されます。僕は今、副学長なので、副学長、学長のところには来ると思います。当然、こういう相談があったのですが、どうしましょうかというのは、秘密を守りつつ、学長と副学長の間で、同じように差配をしていくはずで。

## 5. これまでの取組みの反省、今後の対応課題

**安東** 今まで準備を進めてこられて、もっとこうすればよかったであるとか、これは課題だというふうに思っておられることありましたら、お聞かせください。

**大倉** 何であるときこうしなかったのかとか言う人も今後出るかと思えます。いや、こうもしましたよ、あれもやった上で決めました、と断言できないところは正直なところあります。例えば、学生や教職員の意識調査を事前にしましたかと言われると、していません。ただ、行う必要があるのか否か、そこは難しいところだと思います。今後、行うつもりなのかということ、まだ検討して

いません。委員会で、「時代と共にどんどん世界が変わっておりこういう意見も増えてきたので、この際こういうのしたほうがいいのではないか」となれば、委員会の中でこれから決めていくのだろうと思います。

この委員会は信頼されていると自負しており、それだけ意見交換もしていますし、専門の先生が質問に的確な回答してくれるので、周囲の人たちは安心し、穏やかなのではないのでしょうか。

ただ、何か問題が起きたらどうするかなど、事前に最悪の状態をいろいろ想定して、皆さんのお力をお借りしながら、先進大学の意見を頂戴しながら、委員会で決めておく必要があります。

**安東** そこら辺の話し合いは、やはり委員会でしょうか。どれくらいの頻度で集まっておられますか。

**大倉** 今はもうほぼシステム上で行っています。皆さん忙しく、会議の日程調整をするだけで1週間経ちましたという感じなので。学内eシステムで意見交換したほうが早いですね。このシステムでは人選ができるので、全員に公表したい場合とか、この人だけと話したいとか、委員会だけで話しましょうというスレッドで立ち上げてできるシステムです。

**安東** 次に、トランスジェンダー学生の受け入れ、あるいは教職員も含めてなのですが、今後の対応課題としてはどういうことを考えておられますか。

**中井** 先ほどから言われているように、学生の方が先を進んでいる感はあります。例えば、地域のLGBTQの団体で活躍されたり、イベントに参加したというようなことであったり、学生が先んじて卒業研究の中で取り組むなど、学生が先行してやってくれており、ほんとに後追いだなという感じがしています。若者に追いつけるようになるといいなというのが、今の正直な感じですね。

**小林** 先ほど申し上げたように、認識をアップデートしていくFD活動は必ずやっつけていかないといけない。インクルーシブにしても、特別配慮にしても、そのやり方というのを教員は意外と1年で忘れます。ですから、その仕組みなど、周知しておかないといけないことが実際に多々あります。窓口一つとってもそうで、こういう相談はここでも、ここでもできますといったことを教職員が共有しておかなければなりません。実際、インクルーシブ教育研究センターの青山先生らに毎年講習会を実施していただいていたのですが、そういう講習会は毎年必要で、アップデートをしていかなければいけないと認識しています。

もう一つ、ガイドラインも含めてのアップデートしていかねばなりません。動画を流すことができない一つの理由は、もっと社会の認識は進んでおり、この言葉を使うと誤解をさせてしまうという委員の意見があるからです。教職員、学生を含め、新たな知識や認識を発信する活動のアップデートや、ガイドラインの改正とまではいかなくとも、もう少し緻密なものに変えていかないといけないという認識はあります。来年度以降の課題です。

**中井** そうですね。文言等アップデートしていかないといけないことは間違いありません。

**大倉** もう一つ、これに関しては私学の学園ということがあります。この構内一つ取っても、附属小学校と附属幼稚園がございまして、中学・高校も倉敷や広島にあり、そうした児童・生徒の背後には親御さん、祖父母の方々がおられます。やはり学校法人ノートルダム清心学園となれば、全体がそうだと捉えられ、各学校がそういう体制だと思われても仕方がない。その辺の相互の理解もこれからは強化していかないといけないと思います。

そこで重要なのは理事会です。そういう進捗状況であるとかは、現在、理事長が学長を兼務しておりますので、しっかりと意思決定を述べてくれると思っております。

**安東** 貴学の場合、トランスジェンダー女性の受け入れが本当に早く決定されました。他の女子大学を見てみると、なかなか進まない状況があります。多くの女子大学がまだ踏み切れないというのは、ある意味、学内体制の整備のみならず、学生募集にも影響があると考えているからかと推

察します。そうしたことは貴学では受け入れ決定の引き留め要因にならなかったのかと思います。

学長兼任理事長の迅速な決断と実行指示があったので早く進んだのでしょう。その潔さというか、理念の持ち方が素晴らしいなと思います。しかし、他女子大学ではなかなかそういかず、経営への影響などを考え躊躇していることもあるようです。この点、どうお考えになりますか。

**大倉** 最初の委員会で、そのような意見交換を行いました。究極的な状況を想定した意見交換も行いました。

**安東** やはり誤解というか、十分に知識がない人からは様々な意見も出てきますからね。

**中尾** そのときはどうされましたか。

**大倉** 専門の先生がたくさんおられ、そういう考えがなぜ出てくるのか、どのように考えるべきかについての説明がありました。そして、「そんなこと一つひとつが気になるのならば、これを導入しようなんてそもそも考えません。最初に申し上げたとおり、本学はここで勉強したいとの意思をもつ人たちを受け入れる。入った以上は大学に責任があるので、卒業までよく勉強できるような環境整備に協力する。それが本学である。」という委員の言葉に尽きました。

**安東** 今まで幾つか大学に行きましたが、やはりトップの決断が大きいですね。宮城学院女子大学もそうでしたし、津田塾大学や日本女子大学なども、しっかりとして認識をもち聞く耳をもつ学長がいた。トップがそれを聞こうとしないと、なかなか進んでいかないですね。

**大倉** そうですね。私自身、専門外で全然、そういう勉強をしておりません。ですが、なぜこんなに安心してもらえるのかというと、やはり中井先生や青山先生などいろいろな方が、自分の“かかりつけ医”としてついてくださっているような感じで、疑問を持って尋ねていくと、「ああ、それはこうなのですよ」と返してもらえる。こちらは「あっ、そうなんだ」と納得する。ばたばたしないのは素人集団ではなく、プロに囲まれているという安心感が大きいです。

「困りました」ということは今までありません。専門の先生が、「そういう意見もあるけれど、実際はこうなのですよ」と、きれいごとばかりでないお話もしてくださいます。対応の仕方に関しても、適切なアドバイスもいただいております、何でも相談できますので、ありがたいですね。

**安東** 本日はご多忙のところ、長時間にわたり丁寧にお答えいただき、誠にありがとうございました。

**中尾** ありがとうございました。

## 付記

本稿は、2020-24年度科学研究費・基盤研究(B)「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」(20H01639/23K20173, 代表：安東由則)による成果の一部である。

# Progress and Preparation for the Decision to Accept Transgender Students at Notre Dame Seishin University : An Interview with Key Persons

KOBAYASHI Ken-Ichi<sup>1)</sup>, ODA Kumiko<sup>2)</sup>, NAKAI Toshio<sup>3)</sup>, OKURA Kyoko<sup>4)</sup>  
HAJI Hiroko<sup>5)</sup>, NAKAO Kayoko<sup>6)</sup>, & ANDO Yoshinori (ed.)<sup>7)</sup>

## Abstract :

Notre Dame Seishin University (Okayama, Japan) became the fourth women's university in Japan and the second private women's university after Miyagi Gakuin Women's University to accept transgender women in 2023. In order to clarify the process leading to the decision to accept transgender women and the state of readiness, we conducted an interview with key persons who have played a central role in this initiative. This report is a summary of this interview.

Notre Dame Seishin University, which is based on the Catholic Church, decided to accept transgender women, and was able to start accepting them in less than two years of preparation because of the philosophy and decision of the university president, as well as the tailor-made education that has been fostered at the university, which is tailored to each student, and a well secured care system. In this ever-changing environment, there is no such thing as perfect preparation, and new challenges will arise in the future, but we have no choice but to continue our constant study and improvement.

**Key Words** : acceptance of transgender women, women's university, process of preparation

1) Notre Dame Seishin University (hereinafter abbreviated as NDSU), Vice President, Professor 2) NDSU, Professor 3) NDSU, Associate Professor 4) NDSU, General Manager of Facilities Planning and Management Dept. 5) NDSU, Administrative Director of Academic Affairs 6) Research Institution for Education (RIE), Mukogawa Women's University (MWU), Associate Professor 7) RIE, MWU, Professor